

日記と『作家の日記』

—ドストエフスキーにおける自己物語の問題—

坂中紀夫

1. はじめに

Φ・М・ドストエフスキーの『作家の日記』1877年5・6月合併号は二つの苛立ちから始まっている(1章1-2節)。一つは東方問題に関連したスラヴ民族の隷属状態に対する社会的な性格のもの、もう一つは読者から届く多くの好意的な手紙に交じって匿名の二通の中傷文を受け取ったという個人的な性格のものである。この中傷文の一つは、先月号で彼が自身の健康状態に触れたことに言いがかりをつけるもので、作家は、こうした難癖は、仮に文学に私事はそぐわないとの「文学上の儀礼」(25:126)¹感情に由来したものであるなら一定の尊重に値するが、これら手紙の目的は論争ではなく単なる罵倒にあるとし、そこから議論を罵倒することの心理へと転回させている。

ここで興味深いのは、言いがかりの口実とされ、作家自身もある種の文学上の儀礼からはあまり推奨されないだろうことを理解している、私事とそれ以外の事柄との並置という構成が、当の誌面において、社会的ないらだちと個人的ないらだちとの連続した記述という形で反復されている点である。匿名の中傷家も目を付けたように、個人的な事柄と社会的な事柄との並置は、読者にある種の奇異な印象を与える。なぜなら、それは両者を同列に扱うことであり、その限りで自己と社会とを等価的に捉えうる感覚がそこで働いていることを意味するからである。実に、この奇妙さは、作品の刊行当初からも言論界の論争を呼ぶもので、²当時の新聞には、伝統的な社会評論がもつ文芸規範を『作家の日記』にも当てはめ、そのジャンルの逸脱に否定的な見解を示すものもあった。³例えば、『ペテル

¹ ドストエフスキーからの引用は、*Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в 30 томах.* Л., 1972-1990. による。引用箇所は(巻数:頁数)として示す。以下、引用文の強調等は全て原文である。

² 1873年とそれ以降の『作家の日記』とでは区別が必要である。同様の表現媒体は、すでに1860年代からドストエフスキーの構想にあったものだが(*Гришин Д.В. Дневник писателя Ф.М. Достоевского.* Мельбурн, 1966. С. 121-123; *Гришин, Д.В. Достоевский-человек, писатель и мифы: Достоевский и его «Дневник писателя».* Мельбурн, 1971. С. 41-43), この構想は、1873年においては他者の雑誌を媒体にするという制約から、理想的な実現は見なかったとも指摘される(*Фокин П.А. К вопросу о генезисе “Дневника писателя” за 1876-1877 гг. (Историко-литературный аспект) // Достоевский: материалы и исследования.* СПб., 1996. № 13. С. 127.)。

³ *Волгин И.Л. Достоевский и русское общество («Дневник писателя» 1876-1877 годов в оценках*

ブルグ新聞』は、『日記』の形式の異常さ、つまり一般的なことと極めて個人的、日常的なことが一つになっていること⁴を批判している。

一般的な事柄に私的な事柄を並置させる文章構成は、これまでの社会評論のジャンルからは逸脱として受け取られた。しかし、逆に言えば、『作家の日記』は、私的な事柄に一般的な事柄が並置された記述の総体としても捉えることができる。こうした見方からは、『作家の日記』は「半告解、半日記」⁵ともいえる独特の形式をとった作品として現れてくるだろう。実に、この点を肯定的に評価して、『作家の日記』がドストエフスキーの作品でも特異で深く独創的である」のは、そこに「社会や政治の現象、ナロードや全人類の悲劇を、自分個人の運命における事実として感受し、自らの内奥の私的な経験を、決まって周辺や全世界の生と関連付ける能力」⁶が現れているからだとする指摘もある。要するに、ここで作家は「私的な」日記作者と公的なジャーナリスト⁷の間で揺れ動いているように思われるのだ。

このように、『作家の日記』という作品は、それを一元的に日記ないし社会評論として扱おうとした途端、それらジャンルの伝統的な枠組みから逸脱してしまう構成をとっている。こうした形式的特徴について、作者自身はどう捉えていたのか。この点に関する具体的な言及は、彼の書簡やこの作品自体の記述に認めることができる。例えば、雑誌・週刊新聞『市民』に掲載される形で発表された最初の「作家の日記」では、「私は個人的な楽しみのために、この日記の形式で独り言をいうつもりである」(21:7)と記されている。また、1876年に『作家の日記』を個人雑誌として刊行するに際して主要紙に掲載した宣伝文でも、「これは言葉の文字通りの意味での日記、毎月実際に経験されたことの印象についての報告、見聞きし通読したものの印象についての報告となるでしょう」(22:136)とある。刊行をひかえた同時期の書簡(1876年1月11日付)でも、この作品は「言葉の完全な意味での純粋な日記」、⁸「気まぐれさえも含まれる、個人的に私の関心を最も惹いたものについての報告」(29II:73)であるとされ、『作家の日記』1876年2月号の誌面上でも同様の見解が「私は自分のために私の『日記』を書いている」(22:52)との記述で繰り返

современников) // Русская литература. 1976. № 3. С. 127-129.

⁴ Туниманов В.А. Примечания // Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Л., 1981. Т. 22. С. 298.

⁵ Мочульский К. Достоевский: жизнь и творчество. Paris, 1947. С. 389.

⁶ Розенблюм Л.М. Творческие дневники Достоевского. М., 1981. С. 21.

⁷ Gary Saul Morson, *The Boundaries of Genre: Dostoevsky's Diary of a Writer and the Traditions of Literary Utopia* (Austin: University of Texas Press), 1981, p. 7. ゲイリー・モーソンは『作家の日記』をそのジャンルの特徴から、「闊」にある文学としている。彼はこの文学の特徴として、第一にテキストのジャンルの属性が不明確である、第二に異なるジャンルに属するテキストの並置がある、第三にテキストのジャンルの属性の事後的な変更があるとし、これら三つの特徴を『作家の日記』についても指摘している (*Ibid.*, pp. 49-51, 63, 66-67)。

返されている。しかし、実際の刊行が始まると、こうした構想の困難が自覚され、刊行後の書簡（1876年4月9日付）では、「[...] 私はこれが本当の『日記』になるものと、あまりにナイーヴに考えていました。しかし、本当の『日記』などほとんど不可能で、大衆のための見せかけにすぎません」（29II:78）と述べられている。とはいえ、『作家の日記』は「日記」であるとの作者の理解自体は一貫しており、1877年7・8月合併号では「私は私の『日記』を書いている、つまり目下の出来事でもっとも私を震撼させるものすべてに関する印象を書き留めているのである」（25:195）と表明されている。⁸

以上のように、ドストエフスキー自身は、『作家の日記』を「個人的に私の関心を最も惹いたものについての報告」から構成される「日記」として理解している。とはいえ、この作品を一元的に日記として検討しようとする、その枠組みから逸脱する部分、つまり「半告白、半日記」的特徴がうまく説明できないのだった。日記についての一般的な理解が、個人の内面についての主観的な記述であるとするれば、⁹ この作品は日記と呼ばれるには、あまりに社会的なのである。¹⁰ 実に、『作家の日記』1876年12月号においても、「『日記』の主要な目的は今のところ、わが国民の精神的自立についての理想をできる限り解明し、それを現前する諸事実の流れの中にできる限り指摘することにある」（24:61）とあり、ロシア社会への関心を「主要な目的」に結び付けている。

『作家の日記』のこうした形式と内容との不一致はどう理解すべきなのか。作者の強調の通り、この作品は「私」が問題となる日記なのだとするれば、そこでは社会への関心も自己の問題として表出していることになる。しかも、その関心が「主要な目的」と関連する以上、ドストエフスキーにおいては「自己」と「社会」とが等価的な位置にあることになる。これは、『作家の日記』が日記とされていることから導かれる論理である。しかし、このような等価視はなぜ生じているのか。この説明がなければ、『作家の日記』を日記ないし社会評論として扱おうとした際に生じる不可解さは、単なる印象の問題に留まってしまふ。

以下では、まず『作家の日記』を巡るこれまでの論考を概略的に整理し、それら評価がこの作品の特異な形式に規定されていた可能性を引き出す。そして、作者自身のこの作品の形式に対するこだわりを考え合わせ、議論を日記という文芸形式の特性の問題へと転回する。

⁸ 以上の整理に関しては、次の論考も参照。立石伯「夢と虚無の彼方と現実世界：ドストエフスキーの『作家の日記』の多様性（一）」『日本文学誌要』第59号、1999年、5-6頁。

⁹ 日記を差し当たりこのように定義することの妥当性については、本論第三節を参照。

¹⁰ Д・В・グリシンは、『作家の日記』の約六割が社会評論的な記述であるとしている（Гришин. Дневник писателя... С. 138; Гришин. Достоевский-человек... С. 160）。

2. 『作家の日記』と方法論

『作家の日記』とは、短編小説や回想、文芸評論や社会評論などから構成される、ドストエフスキーが1873年以降、晩年まで断続的に発表した作品である。この作品はしかし、しばしば彼の小説作品と同等の扱いを受けず、その意味で十分な考察を加えられてこなかった。例えば、『作家の日記』の先駆的な研究者であるД・В・グリシンは、1960年代中頃の時点でも、イギリスやアメリカではこの作品に特化した研究はまだ存在しないと指摘し、その理由を次のように述べている。

『日記』の研究文献が存在しないのは、ドストエフスキーの小説に対する圧倒的な関心があり、それら小説のイデーや材料が『日記』に含まれていることへの理解がないためであろう。¹¹

関心の偏りについてのこうした指摘に類比的な見解は、ミハイル・バフチンの「芸術家ドストエフスキーは常に評論家ドストエフスキーに勝利するのである」¹²との言葉にも認められる。ここでバフチンは、その原因を作家の社会評論におけるモノローグ的体系の閉鎖性と小説におけるポリフォニー構造との差異に見ている。この指摘が示唆するのは、関心の偏りに方法論の問題が関与した可能性である。これについては、ジェフリ・カバトによるドストエフスキーの創作の方法論についての論考が参考になる。カバトは、「読者は、フィクションの中であらゆる絶対的権威の概念を否定し、異なる諸世界観の相互作用を明らかにしている同じ作家が、『日記』では絶対的権威を振り回していることに驚かざるをえない」¹³との印象から、この驚きをもたらす創作の方法論上の違いを「想像的方法」と「イデオロギー的方法」とに分け、¹⁴それぞれ次のように整理している。

イデオロギー的方法は、攻撃的な自己主張と他者否定によって矛盾を克服しようとする試みの現われである。[…]

想像的方法におけるドストエフスキーは、対立しあう二項間のより深い関係を自由に探求し、双方の和解を図ろうとする。¹⁵

¹¹ Гришин. Дневник писателя... С. 8.

¹² Бахтин М. М. Проблемы поэтики Достоевского. М., 1963. С. 123.

¹³ ジェフリ・C・カバト (小箕俊介訳) 『イデオロギーと想像力』法政大学出版局, 1987年, 240頁。

¹⁴ ただし、こうした分化に特徴的な「二人のドストエフスキー」を想定する戦略には、ゲイリー・モーソンによる批判もある。「テキストや節に好意的な読解をもっともらしく与えることができないとき、それらは「もう一人の」ドストエフスキーのものにされてきた。二人いるということはスケープゴートをつくることなのだ」(Gary Saul Morson, "Dostoevsky's Anti-Semitism and the Critics," *Slavic and East European Journal* 27:3 (1983), p. 312)。

¹⁵ カバト 『イデオロギーと想像力』 vii-ix 頁。ただし、カバトは、「ドストエフスキーはいきなり統

しかし、関心の偏りとそれを結果させたところの方法論の違いという図式の妥当性は、ロバート・ベルナップの以下のような論考を参照すると、十全ではない。ベルナップは、ドストエフスキーの社会評論には、逆説の繰り返しによる論理展開が特徴的であるとし、そうした展開を可能にする叙述を「調停者の言語」¹⁶と呼んでいる。彼によれば、こうした叙述は、小説においてなら空間的に展開できた対話的構造が、時間的に表現されたもので、「小説においてドストエフスキーはアンチテーゼを同時的に提示することができたのだが、[...] 社会評論的な文章ではアンチテーゼは順次的に現れる」¹⁷のである。つまり、対話性は社会評論においても働いているが、文芸形式上の制約にその表出形態が左右されているのである。

以上を整理しよう。『作家の日記』を巡っては関心の偏りが生じており、これには小説と社会評論との創作方法の違いの関連が推察された。とはいえ、これら方法論は必ずしも互いに排他的ではなく、社会評論においても、彼の小説の特徴である対話性の原理は働いているとし、その表出形態の違いの原因に文芸形式上の制約を見る論考も存在した。これらのことから、続く議論は、小説と社会評論の双方に指摘できる原理の共通性にもかかわらず、関心の偏りを結果させるその文芸形式の問題へと転回すべきことが導かれるだろう。『作家の日記』は、作者の自己規定では日記とされているのであった。

3. 日記の効用

日記とは何かという問題を考える上で参考になるのが、アンソニー・ギデンズの一連の論考である。日記を記すという行為は、より一般化して、自分で自分を物語る行為と見なせる。以下、これを自己物語の行為と呼ぶとして、ギデンズによれば、こうした行為は近代に特徴的な行為なのである。では、それは、近代のいかなる特性によって促されたものなのか。これを考えるには、前近代においては近代に比して自己物語が一般的でなかったことの原因を探ることが有効である。

自己物語が自己に対して意識的に関係しようとする行為であるとすれば、それは存在論的な関心に促された行為である。であれば、前近代において自己物語が一般的ではなかったことの原因には、前近代における存在論の問題が関連していたことになる。前近代における存在論の問題について、ギデンズは次のように言っている。

合、認容、芸術的世界観の水準に達するわけではなく、イデオロギー的衝動から自らを解放して初めてそこに達するのである。かくて、イデオロギーは想像力への障碍であると同時にそこに至る踏み台でもあることになる」(同上、232頁)と、両者の相補性にも言及している。

¹⁶ Robert L. Belknap, "Dostoevsky's Nationalist Ideology and Rhetoric," in Charles A. Moser, ed., *Russia: The Spirit of Nationalism* (Jamaica, N. Y.: St. John's University, 1972), p. 96.

¹⁷ *Ibid.*, p. 97.

前近代の文脈では、伝統が、行為や存在論的枠組みの分節化に主な役割を果たしていた。伝統は、特に存在論的規範に適合した社会生活を組織化する手段を与える。第一に、伝統は、現実仮想的未来の広がり制限するようなかたちで時間を秩序化する。最も伝統的な文化も含めて、すべての文化において、人々は、未来、現在、過去を区別し、ありそうな未来を考慮して、あれこれと行為の方針を吟味する。だが、[...] 伝統的な実践様式が支配的なところでは、過去は広範な「認証された実践」を未来に持ち込む。時間は空虚なものではなく、一貫した「存在の様式」が未来を過去と関係づける。加えて伝統は、典型的には認知的要素と道徳的要素を混合する、事物の確かさの感覚を創り出す。世界が現在のようであるのは、世界がそうあるべきだからである。¹⁸

この指摘によれば、前近代においては、伝統が可能な実践様式の選択肢を制限しており、存在者はこの過去に選択された実践様式を未来においても踏襲する。また、こうした踏襲に対する疑念は、伝統が認知的要素（世界の現在のあり方）と道徳的要素（世界がどうあるべきか）とを等値させる以上、抑制される。つまり、「伝統文化では、昨日したことを今日もおこなうのが普通であった」¹⁹ のだ。こうした状況においては、自己物語はそもそも必要とされない。これに対し、ギデンズは近代における存在論について次のように指摘する。

伝統社会の後にくる社会秩序において人びとは、自己についての叙述を、現実に絶えず書き直さなければならないし、また、かりに人が人格的自立を生きる上での安心感と結びつけていく必要があるのであれば、ライフスタイルの実践は、そうした自己の記述に沿うものでなければならない。²⁰

伝統による存在論的枠組みの分節化は、近代において後退する。つまり、近代においては、伝統が存在論的な準位にまで及ぼす存在者の経験の組織化は弱まり、可能な実践様式の選択肢が増大するのだ。逆にいえば、それは、社会の増大する偶有性・複雑性がもたらす過剰負担に由来して、個人が存在論的不安にさらされる蓋然性が高まることを意味する。そして、この不安は、それに対する防衛反応として、個人に自己の同一性の再帰的な選択を迫ることになる。要するに、近代においては、自己は自らのあり方についての伝統から

¹⁸ アンソニー・ギデンズ（秋吉美都、安藤太郎、筒井淳也訳）『モダニティと自己アイデンティティ：後期近代における自己と社会』ハーベスト社、2005年、52-53頁。

¹⁹ アンソニー・ギデンズ（松尾精文、松川昭子訳）『親密性の変容：近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房、1995年、115頁。

²⁰ 同上、114-115頁。

の言及を失い、それを自ら構成する形で補うのである。自己物語はその明示的な営みである。

存在論的不安と自己物語との因果性は、より原理的な局面においても確認できる。ここで参考になるのが浅野智彦による論考である。²¹ 存在論的不安の感受には社会的相互作用が前提にあるが、存在者はそこで、価値論的肯定／否定と存在論的肯定／否定という二つの評価を被り得る。価値論的肯定とは、当事者の正価値への帰属をもとにした評価である。ただし、この評価は、それが別様の評価でもありえた可能性、つまり当事者の負価値への帰属をもとにした否定の可能性も伏在させていなければ成立しない操作である。従ってそれは、特定の価値への帰属の「有／無」に関心を置く、「肯定／否定」の「価値論的コード」に準拠した弁別である。一方で、存在論的肯定とは、こうした価値論的評価を受ける当事者の存在そのものに言及するものである。この言及は、当事者の「存在／非存在」に関心を置く、「存在論的コード」に準拠した弁別である。とはいえ、この差異を横断できるような存在者（非存在でありえる存在）は定義上、存在しえないので、否定の操作の可能性を欠いたそれは、それ自体としてはコードではありえない。だがこの問題は、存在論的差異を擬制的に利用することで解消される。存在論的差異の擬制とは、次のようなことである。「例えば、非近代社会においてはしばしば共同体の内外の差異が存在論的コードとして利用される。つまりその社会の成員はその共同体に帰属しているかぎり、まずは（存在論的に）肯定されているということだ（逆にいえば、そこから疎外されるとき彼らの存在は否定されるということになる）。そしてしばしば彼らにとってその「共同体」と「世界」とは同値であるから、上のことは彼らがこの世界に生きているかぎりとりあえずは肯定されているということの意味している」。²² ところが、近代社会においてはこうした存在論的コードに基づく社会編成が後退し、価値論的コードに準拠した存在者の弁別が前面化する。資源の配分を例にとれば、それは、誰であるのか（共同体における当事者の地位）ではなく、特定の価値への帰属（例えば、貨幣の有無）に関心を置いてなされるようになるのだ。このことは、近代社会における存在者は、存在しているだけでは肯定されず、自己の肯定性が、価値論的コードに準拠した判断の問題となることを帰結させる。だが、肯定が肯定として成立するには、否定の相関項の伏在が条件にあり、従ってそこには必然的に否定の操作が潜在する。つまり、近代社会における自己は、否定的な評価に潜在的にさらされ続けるといふ存在論的不安に陥らざるを得ない。ここで自己は、それへの防衛反応として、価値論的コードにおける肯定性の獲得に関与的な選択肢の遂行に迫られることになる。自己物語は、存在に関連的な価値が問題化された場合における、自己の正価値への

²¹ 浅野智彦「自尊心：自己のパラドクス」『ソシオロギス』第16号、1992年。

²² 同上、76頁。

帰属の証明として要請される。

4. 『作家の日記』の効用

以上の指摘は、『作家の日記』の刊行時期の問題について示唆を与える。19世紀後半、ヨーロッパ・ロシアでは社会の都市化がきざし、特に農奴解放以降は、それらの都市にも中心的な産業構造を第一次産業から第二次産業へと転換させるものが現れ、都市住民の職業構成もそれに応じて変化を見せた。²³ これらの点から、B・H・ミローノフは、19世紀前半のロシアは産業化の前段階にあったのに対し、20世紀を迎える頃にはその初期段階にあったと指摘している。²⁴ アーネスト・ゲルナーによれば、産業社会では、それまで伝統が固定させていた社会構造が解体し、本質的に無作為で平等的かつ流動的な全体性がそれを代替する。²⁵ これらの指摘は、19世紀後半のロシアが構造的な変革を迎える時期にあったことを示すものだ。伝統的な価値体系が崩壊するそうした社会で予測されるのは、価値の複雑化である。このとき、個人は、その複雑化に応じた多様な価値論的弁別で肯定性の獲得を迫られる。この点は、日記としての『作家の日記』がこの時期に必要とされた理由に一定の示唆を与えている。

実に、『作家の日記』においても、こうした社会的変容が、過去との歴史的な対照において記述されている。1876年12月号では、過去と現代の少年の家出についての考え方が比較されている(2章1節)。作者によれば、かつての少年たちは家出の計画を立てても、結局は思い留まったが、現代の少年たちはそれを思いつくや、実行してしまう。これは、「父親や母親、一定の信仰や原理への義務感や責任感」(24:58)といった規範意識が、かつては社会的に機能していたのに対し、現代ではそうした「拘束や感覚が幾分、弱まった」(24:59)ためであるとされる。また、1877年1月号でも、過去と現在とで違いを見せる個別的な事例が、社会の全体的な変容の文脈へと関連付けられている(2章5節)。ここで作者は、トルストイが自伝的小説『少年時代』で描いたかつての空想の自殺と、最近ある手紙で知った現実の自殺とを比較している。いずれの場合も当事者の年齢や自殺を考えるに至る状況は類似しているのだが、作者によれば、両者の間には大きな違いがある。トルストイが少年であった時代では、自殺はただの空想だったが、現代の少年は、「空想するや、実行してしまっただ」(25:35)。両者のこうした態度の違いは、「[...] レフ・トルスト

²³ *Миронов Б.Н.* Социальная история России периода империи (XVIII-начало XX в.): генезис личности, демократической семьи, гражданского общества и правового государства. СПб., С. 282-289, 301-312.

²⁴ Там же. С. 309.

²⁵ アーネスト・ゲルナー(加藤節監訳)『民族とナショナリズム』岩波書店、2000年。

イ伯爵が我々のその歴史家であったような、中・上流階級の静かで安定した、古くからのモスクワ地主家族の中に存在していたものとは全く違う新たな現実が存在する」(25:25)ことに帰せられている。また、このトルストイ的な時代からの変容は、別の個所では、農奴解放を意味する「2月19日の改革」(25:174)との関連性を指摘されている(1877年7・8月合併号1章1節)。

以上のように、農奴解放を経た1870年代のロシア社会は、少なくともドストエフスキ一の主観的な意識においては、変動の時代であり、この推定は、以下に見るような変化に対する彼の保守的な見解によっても支持される。1870年代は、ロシアにおいて新聞が拡張した時代であり、²⁶『作家の日記』でも社会の出来事を知らせる新聞への頻繁な言及がなされている。²⁷その内、新聞記事への参照を契機に、議論が社会の在り方へと転回していくのが、1876年2月号の論考である(2章)。これは、その裁判の様相が新聞で伝えられたある虐待事件を追ったもので、判決としては無罪が言い渡されている。作者はここで、自分の娘を折檻した父親を一方では激しく批判しながらも、他方では無罪判決自体は妥当であるとしている。この見解は、親子を引き離すだろう有罪判決が、「家族の神聖を保護すべき裁判所自体が、家族を破壊する」(22:51)ことへの危惧に基づいており、家族が社会を構成する基礎的な単位である以上、それは社会的な統合への願いを示すものである。また、1877年7・8月合併号でも、同様に新聞で知った別の虐待事件に言及し、これを社会の問題へとつなげている。これは、三人の実子を虐待したかどで起訴された夫婦についての事件で、作者は憤りから、架空の裁判長として夫婦に訓示を述べている(1章4節)。裁判長が非難するのは、彼らの子に対する愛情の希薄さである。訓示によれば、子への愛とは自然的であり、従って彼らを愛せないことは、誰も愛せないことを意味する。これが問題であるのは、「愛には我々自身を再生させるほどの絶大な力がある」(25:193)からである。「子どものおかげで、より完全なものへの人間社会の再生の苦悩も短縮されるのだ。この完全性が実現され、我らの文明の苦しみと当惑とがついに終わるように！」(25:193)。作者はこう述べ、統合的な社会の想像で、問題を差し当たり解消している。

新聞を契機に、議論が直接、社会の問題へとつながるのが、降神術を主題にした論考である(1876年1月号3章2節、同年3月号2章3節、同年4月号2章3節)。1870年代は、霊媒現象への関心がロシアにおいて大衆的な広まりを見せた時期であり、文学においても

²⁶ Б・И・エーシン(阿部幸男、阿部玄治訳)『ロシア新聞史』未来社、1974年、60, 75, 81-82頁。

²⁷ 新聞や雑誌、手紙への頻繁な言及は、本論第二節で参照したベルナップの指摘する「通時的対話性」との関連において示唆的である。対話性の発現には他者の声が必要であるが、基本的に一人称叙述が採用される日記では、それは原理的に困難である。そこで、新聞などへの頻繁な参照は、想像上の他者の声を借りることなく、一人称の制約を解消し、記述の中にそれを自然に導入することを可能にする。

それは社会的な文脈において語られた。²⁸ ドストエフスキーもこの問題を新聞や雑誌、手紙などで目にし、関心を寄せている。ここで彼が注目しているのは、降神術を信仰する側とその非科学性を非難する科学者の委員会との対立である。この対立についての彼の見解は両義的で、一方では降神術に素朴に否定的であるが、他方では委員会に対しても批判的である。後者が間違っているのは、「余りに侮辱的で高慢な調子」(22:101)の報告書を提出するような方向性にある。「私が思うに、降神術を信じたい者は、講義をしても、いくら委員会を開いても、決して止められないし、信じない方は、もし全く信じたくないのだとさえすれば、決して誘惑できない」(22:127)。ここで問題にされるのは社会の統合性である。というのも、信仰にも不信仰にもそれ自身に「力」がある以上、批判による問題の解決の試みは、むしろ「降神術のために互いを社会から追い出す」(22:127, 37)ことになるからである。

社会的変容に作家は以上のように反応している。しかしこれは、日記という形式でなくとも可能な試みである。事実、社会の記述という構想は、以前からも彼の想像力の中にあつたものだ。例えば、『悪霊』においてリーザは、一年間のロシア社会の諸出来事をまとめ、「その一年間のロシアの精神的、道徳的、内面的な生活の絵巻となる」(10:104)刊行物の計画を立てる。これは、『日記』の主要な目的は今のところ、わが国民の精神的自立についての理想をできる限り解明し、それを現前する諸事実の流れの中にできる限り指摘することにある」(24:61)との発言と内容的に同じである。しかし、こうした同一性にもかかわらず、両者は次の一点において本質的に異なる。すなわち、「リーザの計画における「私」は抑制的で隠れた形をとる。この計画の本の主要な機能は、情報の収集や索引にあるのだ。『日記』における「私」の位置は、それとは原理的に異なる。そこではいつも、ドストエフスキー自身の意見や結論が一番にあり、事実の選択はこの出版物の構造では下層をなしている」。²⁹ ではなぜ、後者の形式が選択されたのか。この問題に関して、示唆的であるのは、『作家の日記』に時期的に隣接し、同じく自己物語である「自伝」として設定された小説『未成年』の「創作ノート」である。そこには、「全てに崩壊の思想が見られる、というのも全てが分離し、ロシアの家族のみならず単に人々の間でさえいかなる紐帯も残っていないからである」(16:16)などの言葉とともに、³⁰ 小説の形式として「自分から書く。私という言葉で始めること」、主人公が「ただ自分のために」(16:47)書く

²⁸ Панченко А.А. Спиритизм и русская литература: из истории социальной терапии // Деревянко А.П. (ред.) Труды отделения историко-филологических наук. М., 2005. С. 533, 536-537.

²⁹ Туниманов, В.А. Публицистика Достоевского. «Дневник писателя» // Достоевский – художник и мыслитель: сборник статей. М., 1971. С. 169.

³⁰ 時代状況と『未成年』の関連性については次を参照。佐藤嘉一『物語のなかの社会とアイデンティティ：あかずきんちゃんからドストエフスキーまで』晃洋書房、2004年、107, 143-149頁。

ことの重要性が記されている。³¹ ここで、社会的変容を背景に、自己物語という形式で語るという構図において、『未成年』と『作家の日記』とは類比的である。また、『未成年』の冒頭では、「我慢ができなくなって」主人公は「自伝」(13:5)を書き始めたとされており、このことは、その執筆が持つ何らかの慰撫的効果に関する作者の理解を窺わせる。その効果とは、社会の複雑化による起こりえる存在論的不安の高まりに対して、自己物語により獲得される価値論的肯定性の感覚に他ならない。

『未成年』と『作家の日記』は、社会や価値体系の変化を背景に、それへの防衛反応として自己物語が試みられるという点で共通している。ただし、前者において主人公が基本的に「自己」を語ることで、一定の安心を得るのに対し、後者においてドストエフスキーが語るのは「自己」と「社会」についてである。自己物語が自己の存在論的不安に由来するのだとすれば、そこで語られるのは基本的に自己に関連的な事柄となる。しかし、彼は自己の価値体系に動揺をもたらす社会的変容(家族の崩壊や降神術を巡る社会的な対立)に対し、社会の統合を望む言辞を述べることで、差し当たり解決を図る。実に、彼は、ロシア社会の諸問題にはその根本的な治療が必要であると、「私が『日記』を企てたのも、部分的には、その薬について力の限り語るためであった」(24:52)(1876年12月号1章4節)と述べている。つまり、ここでの自己物語は、自己ではなくいわば社会の同一性の確立に寄与的なものだ。問題は、なぜ日記において自己ではなく社会の「薬」が必要とされるのか、なぜそれが自己の安心に寄与するのかである。ここで考えられる説明は、社会の問題が実存的な問題として感受されている場合である。この場合であれば、社会について語ることが自己の不安の解消に関与的たりえる。しかしそれは、社会が自己へと接続される仕組みという別の問題を生むものだ。

5. 社会と自己

社会と自己との接続が生じているとして、それは具体的な記述の中で確認されなければならない。ここでは、『作家の日記』で展開される社会についての記述全般に、ロシア人の問題が関連付けられていることから、彼のロシア人論に参照する。この参照により、この作品の多くを占める社会評論的な記述の共通の前提が説明され、それにより、自己と社会とが実存的な意義において接続される仕組みの一端を探る。

『作家の日記』の随所において、ドストエフスキーはロシア人論を展開させているが、そのうち最も説明的なものの一つが、1880年8月号の「プーシキン論」である(2章)。作家はここでまず、プーシキンの特異性として彼の「全世界的に共鳴しうる能力」(26:145)

³¹ これに関しては次の論考を参照。松本賢一「ドストエフスキイ『未成年』における<благообразие>について」『言語文化』第11巻第2号、2008年、191-198頁。

を指摘する。これは具体的には、彼の作品における外国人の登場人物の形象における、そのナショナリティの忠実な再現である。つまり、「全世界的に共鳴しうる能力」とは、「他国民の精神に自分の精神を化身させる能力」(26:146)のことなのだ。しかも、作者によれば、この能力はプーシキンに限定されるものでなく、ロシア人の主要な能力とされる。プーシキンの偉大さは、「国民的ロシア的力」(26:147)としてのその能力を先駆的かつ最も明確に発揮した点にある。この意味で、プーシキンはロシアに対する「予言的な」(26:131, 136, 137, 147)現象であり、予言的である以上、彼が示したような「全世界性と全人類性」(26:147)は、ロシア人が将来的に実現させる様態として定位されることになる。つまり、このときロシア人は「全人」(26:147)と化し、全てのヨーロッパ人はこのロシア人の包摂性において取り込まれ、あらゆる矛盾がそこで解決されるのである。

しかし、以上の論説はある奇妙な印象を与えるものだ。というのも、ロシア人が任意の国民になれるとの想定は、一方では「兄弟的団結」のための肯定的意義を含むが、他方ではロシア人としての特殊性が「全人」という形で損なわれる否定的な契機にもなるからである。実に、作者自身も、こうした否定的な契機が、ロシア人が「全世界的和解のために、万人のしもべ」(23:47)になりかねないことを理解している(1876年6月号2章4節)。つまり、ここでロシア人としての特殊性は、「しもべ」という一般的な形式にとって代わられるのである。このロシア人観には、ロシア人とは任意の国民になれる「全人」であるとの主張と、それでもなおロシア人であることへの固執が併存している。換言すれば、彼の説明は、ロシア人をほとんど人類と同一視するものであるが(いかなる国民にでもなれる)、それは人類ではなく依然として「ロシア人」と呼ばれている。これは、「類」と「種」との混交ともいえる奇妙な事態である。

ここでロシア人は、抽象的かつ具体的な単位として感受されている。ところで、このような感受の在り方は、ナショナリズムを可能にする想像力と類比的である。抽象性が具体性において実現されるこのようなロシア人理解は、特殊主義と普遍主義の両立として捉えられる。そして、ナショナリズム研究の指摘するところによると、この両立こそがネーションの想像力に特徴的な形式なのである。例えば、我々は見ず知らずの特殊性を欠いた、その意味で普遍性の位相に付置される抽象的であるはずの「日本人」を、具体的な存在として想像する。この逆説はネーション以外の普遍的形式との比較により強調することができる。例えば、性差や思想などの名において、人類はネーションの場合のような途方もない犠牲を払うことはなかった。³² これは、普遍的形式として理念的であるはずのネーションが、それ自身への深い執着を可能にする内容的特定性も備えていると考えなければ説明

³² 次の論考を参照。ベネディクト・アンダーソン(白石隆, 白石さや訳)『定本想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行(社会科学の冒険: 2-4)』書籍工房早山, 2007年。

できないことである。つまり、それは本質的に特殊主義と普遍主義とが両立する中で成立してくる現象なのである。³³

以上のように考えるなら、『作家の日記』が、作者の主張通り日記であることが、以下のような論脈で、矛盾なく説明されるだろう。日記とは個人の実存的な問題が綴られるべき文芸形式である。だが、この作品の大部を占める記述はロシア社会に関連する記述であり、この点でそれは非日記的である。ただし、社会についての記述の裏側には、ロシア人の存在が控えている。そしてそのロシア人の存在は、ナショナリズムの働きが媒介となれば、個人の実存に関連付けて感受されえる。ドストエフスキーがロシア人について言及する際の語り口は、ナショナリズムが現象する際の想像力と類比的である。ゆえに、彼においては、社会的な出来事も実存的な意義をもった問題として感受されていたとの想定が成り立つ。これは、『作家の日記』が日記の要件を満たすことを意味する。

6. ナショナリズム

ただし以上の説明は、なぜナショナリズムが『作家の日記』に影響しているのかという別の問題を生じさせる。というのも、「シヴィック／エスニック」というナショナリズムの古典的な類型論の枠組みからしても、³⁴ その政治体制と民族的多様性からロシア帝国はナショナリズムに適合的ではなく、「ロシアの国家形成は国民形成を阻害した」³⁵ とも指摘され、また歴史的に見ても、18世紀ロシアにおける国民意識はまだ自明ではなく、³⁶ 19世紀前半についても同様の見解を示す向きがあるからである。³⁷

柄谷行人はネーションが資本制と国家の成立以降に現れることから、その感情的な基盤が、市場経済の浸透や国家の支配により解体される共同体の想像的回復にあるとしている。³⁸ つまり、ネーションとは資本＝国家への対抗であると同時に、その矛盾を想像的に解消する両義的な役割を担っているのだ。この指摘は、ナショナリズムが要請される一つの仕組みを説明している。『作家の日記』1876年3月号の「個別化」と題された論考では、これに類比的な状況が描かれている（1章3節）。作者はここで、ロシア社会の「個別化」という新しい現象に着目し、続いて読者から送られてきた論文を紹介する。彼の説明によ

³³ 次の論考を参照。大澤真幸『ナショナリズムの由来』講談社、2007年。

³⁴ Hans Kohn, *The Idea of Nationalism: A Study in Its Origins and Background* (New Brunswick: Transaction Publishers, 2005).

³⁵ Geoffrey Hosking, *Russia: People and Empire 1552-1917* (Cambridge: Harvard University Press, 1997), p. xxiv.

³⁶ Hans Rogger, *National Consciousness in Eighteenth-Century Russia* (Cambridge: Harvard University Press, 1960).

³⁷ Касьянова К. О русском национальном характере. М., 1994. С. 36-37.

³⁸ 柄谷行人『世界史の構造』岩波書店、2010年、第3部第3章。

れば、「個別化」する社会とは、思想や実践における人々の共通性が失われ、その結果、個人が独自に行動し、それが共同体の歴史からの断絶となる空間である。また、この失われた紐帯は経済団体などによっても代替され得ず、むしろそれは「個別化」を促進させてしまう。読者の論文は、この考えを裏付ける形で紹介される。その内容は、当時のロシアの経済社会における連帯の在り方を探るもので、論文は現状の組合や協会の在り方を、相互扶助ではなく自己の不利益の回避を目的とした功利主義に基づいていると批判し、これとは別の信頼に基づく連帯の在り方を提唱する。ドストエフスキーもまた、「今日、突然、襲ってきた我ら社会のその構成要素への甚だしい化学的分解」を危惧しており、この主張は「原則的に完全に正しい」(22:83, 82)としている。彼が「個別化」と呼ぶこの状況は、共同体の想像的回復が要請される状況に適合的と言える。ただし、ここで作家がその具体的なイメージとしてあげるのは、民衆への帰一である。この構想は、ナショナリズムの働きと同様の効果を、共同体の解体に直面する作家にもたらすものであろう。

私が思うに、我々は、民衆に対し自身を理想とし、民衆が我々と同じようになるのを要求できるほど、立派で素晴らしい人間ではあるまい。[...] 民衆の前に膝まづくべきは我々であって、思想もイメージも全て彼らに期待しなければならない。[...] 要するに我々は、二百年も家に寄りつかず、それでもやはりロシア人として帰ってきた放蕩息子として、頭をさげねばならないのである [...]。(22:44-45) (1876年2月号1章2節)

ナショナリズムの『作家の日記』に対する影響の想定は、状況的な妥当性とは別に、この作品の記述からも傍証を得られる。アンソニー・ギデンズによれば、ナショナリズムは人々に集団的アイデンティティの基盤を提供するが、その際、その集団の歴史的・文化的な同一性を確実にする象徴が利用される傾向がある。³⁹ この場合、特に重要なのは、共同体の産物であり、どの世代の個人にも先行して存在する言語である。この点で、ナショナリズム感情は言語への愛着と結びつきやすい。『作家の日記』1876年7・8月合併号では、これがロシア語への愛着という形で表出する(3章)。作者はここで、ロシア人のフランス語使用を批判する。これが問題であるのは、思索が言語で為される以上、それが外国語である場合、「自分の思想と精神的欲求をその深みまで組織化するための材料をもたず、生涯、死せる、病的な、盗んだ言語をもつだけの者は、その臆病で暗記的な、自分用に拡張しない粗野な形式をもっては、自分や自分の精神を表現する際、知的、精神的な努力と緊張とで永遠に絶えず悩まされるだろう [...]」(23:83)からである。その解決として彼は、幼児期からのロシア語教育の強化を提唱している。

³⁹ アンソニー・ギデンズ(松尾精文、小幡正敏訳)『国民国家と暴力』而立書房、1999年、247-251頁。

またギデنزは、ナショナリズムを近現代社会における伝統の喪失という文脈でとらえている。⁴⁰ 近現代における日々の生活には、存在論的安心感を与える伝統の下支えがなく、心的意味が希薄である。ナショナリズムはこれを充当する形で共同体の安心感を疑似的に回復させるのだが、その際、国家の脅威はこの心的体系に不全をもたらす。ナショナリズムの高揚が恒常的ではなく、戦時などにおける一時的な現象であるのもこのためだ。この指摘は『作家の日記』にも当てはまる。この作品の刊行は、露土戦争（1877-1878年）と時期的に重なっているが、ロシアではこの戦争を契機に、汎スラヴ主義という形でロシアの政治的役割への民衆的な期待が高揚した。⁴¹ これと同調するように、『作家の日記』における東方問題に関する記述も、次第に扇情的な性格を強めていく。このことは、論考の各節に付せられた題名を見るだけでも明らかである。開戦前の東方問題に関する論考には、「東方問題」や「東方問題の新局面」などそれ自体は中立的な題が付されているが（1876年6月号2章3節、同年10月号2章1節）、ロシア帝国がオスマン帝国に宣戦布告をする1877年4月の『作家の日記』では、「戦争。我々は最強である」や「戦争は必ずしも鞭ではなく、ときには救いである」とそれは過激になる（1章1・2節）。ゲイリー・モーソンは、ロシアが導く全世界的なユートピアの到来という『作家の日記』における予言に関して、「これらの予言が成就しないとき『日記』は中断され、新たなユートピア的期待を待ってようやく再開される」⁴² と指摘し、1881年のその再開をロシアのトルクメニスタン占領に関連付けている。戦争とナショナリズムの高揚との関係を考慮すれば、1881年のこの作品の再開は、そこにおけるナショナリズムの働きを傍証するものである。

以上、『作家の日記』におけるナショナリズムの作動が、状況的に蓋然的であること、それが記述自体からも確認されることを示した。この見立ては、1877年3月号の「ユダヤ人問題」とそれに続く論考（2-3章）における反ユダヤ主義的見解をナショナリズムの文脈で検討することを可能にする。⁴³ ドストエフスキーはここで「ユダヤ的気質」や「ユダヤ的理念」（25:75, 85）などの言辞と共に、彼らの政治経済、道徳的傾向を否定するのだが、II・トロプは彼のこうしたユダヤ人観の中に「ある種のイデオロギー的羨望」⁴⁴ が潜んでいたことを指摘している。この羨望はロシア社会とユダヤ人共同体との作家による

⁴⁰ 同上、251-253頁。

⁴¹ Astrid S. Tuminez, *Russian Nationalism Since 1856: Ideology and the Making of Foreign Policy* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 2000), pp. 75-100.

⁴² Morson, *The Boundaries of Genre*, p. 36.

⁴³ ドストエフスキーの反ユダヤ主義についての代表的な論考としては次を参照。David I. Goldstein, *Dostoyevsky and the Jews* (Austin: University of Texas Press, 1981); 中村健之介『永遠のドストエフスキー』中公新書、2004年、第五章。

⁴⁴ *Троп И. Достоевский: логика еврейского вопроса // Мальтс А (ред.) Сборник статей к 70-летию проф. Ю.М. Лотмана. Тарту, 1992. С. 308.*

恐らく無意識的な比較から生じている。トロプによれば、「ロシア社会にドストエフスキーが探したものは、階級的、宗教的統一の可能性であったが、彼が内的な統一と宗教的信仰、さらには土壌なき土壌性さえ見いだしたのはユダヤ民族の中だった」。⁴⁵ このユダヤ人の「内的な統一」とは、「国家内国家」という、ユダヤ人の閉鎖性が可能にするとされる状態である。こうした理想的な状態が実現されている一方で、彼の把握では、ロシア社会は「物質主義、個人的な物質的保証を求める盲目的で貪欲な渴望、あらゆる手段を使った個人的蓄財の渴望の到来」(25:85) という危機にあった。ここで社会の脅威として挙げられている物質主義や拝金主義は、作家が用いる「ユダヤ的気質」や「ユダヤ的理念」などの概念を構成する特徴である。つまり、ロシア社会とユダヤ人共同体との比較が展開される「ユダヤ人問題」以下の議論が示唆しているのは、実のところ、彼がロシア社会に生じつつあるこうした否定的特徴をユダヤ人共同体に「投影」⁴⁶ しながらも、彼らの伝統的理念がその「国家内国家」において維持されていることへの無意識的な羨望だったのである。

7. まとめ

本論は、小説への関心の偏重という『作家の日記』を巡る問題を発端に、この作品の独特な形式に考察を加えてきた。作者自身の理解では、それは文字通り日記なのであった。日記の効用には、自己の同一性の再帰的な獲得による、存在論的不安への対処が指摘される。つまり、日記は原理上、存在論的であり、従ってその記述の内容も多分に実存に関わることが予想される。しかし、『作家の日記』ではロシアの社会状況に関する記述が支配的なのだ。本論はこの形式と内容の不一致について、ナショナリズムの媒介を想定することで、説明を試みた。というのも、彼のロシア人理解における想像力が、ナショナリズムが現象する際の想像力と同型的であったからである。そして、ナショナリズムがロシアの問題を自己の問題へと接続させる思想であることを考慮すれば、日記において社会に言及することの非日記性は、その働きを媒介に、『作家の日記』においては日記性へと反転するのである。

私的な事柄と一般的な事柄の並置という構成については、П・Е・フォキンも考察している。⁴⁷ その論説は、上記の見立てと類似しており、本論の妥当性を補強するものである。彼の論考の考察対象は、1876-77年の『作家の日記』であり、特に、この時期の作家の心

⁴⁵ Там же. С. 308.

⁴⁶ Там же. С. 310.

⁴⁷ Фокин П.Е. К вопросу генезисе “Дневника писателя” 1876-1877 гг. Ф.М. Достоевского (биографический аспект) // Степанян К.А. (ред.) Достоевский в конце XX века. М., 1995.

理状態に関心が向けられている。フォキンが注目するのは、雑誌刊行をひかえた時期の作家の書簡である。この時期の書簡には、健康状態への不安から派生した、死期についての強迫的な想念が吐露されており、その一つには次のような記述がある。「間近に迫る終わりのことを考えて、残された人生の末端を大切にすればするほど、人生だけでなく自分さえもよくすることができるのです」(29 II:111) (1876年7月23日/8月4日付)。ここでフォキンが注意を促すのは、「人生だけでなく自分さえも」という部分である。この一節の中で「人生」と「自分」という言葉が別々に並べられていることは、それらが概念上、重複しないことを示唆するものだ。つまり、この「人生」は、「自分」を除く範域から構成される、社会的な生を指示する言葉として使われたことが考えられるのである。であれば、この一節は、死期を意識した作家が、社会と個人を問題化することへの決意を示したものであるのだ。フォキンは、社会と個人の問題の解決という二重の課題と『作家の日記』の複雑な形式とに関連性を見出し、この作品がその課題を遂行するための手段だったと指摘している。

『作家の日記』は、あらゆる意味において理想的な形式である。それはこの二つで一つの課題を解決することを可能にする。出版物としてのそれは、人生の改善に向けられた社会評論であり、日記としてのそれは自己の改善に向けられている。言葉=行為としての『作家の日記』は、B・A・トゥニマノフの妥当な指摘のように、「現実の形成への直接参加」のみならず、自分自身の形成にも向けられているのである。⁴⁸

フォキンは、『作家の日記』における社会評論と日記との併存を、社会の問題と個人の問題に同時に応えるという課題に対処した結果であると捉えている。彼の考えではこの作品は、二つの課題を同時に遂行するための理想的な手段であったわけだが、我々の以上の考察が主張するのは、その二つはドストエフスキーにおいては分裂していなかったということだ。つまり、社会の問題も彼にあっては個人の問題に接続していたのであり、その媒介として、個人が出来事を実存的問題として感受できる社会関係の領域を、それが不可能であるような領域にまで拡大させるナショナリズムが働いていたのである。この見立てに利点があるとすれば、それは『作家の日記』は日記であるとの作者の自己規定を無矛盾的に説明しえることにある。また、この説明は、なぜこの作品が関心の偏りと呼ぶようなある種の読みにくさを具えているのかをも明らかにするものである。というのも、日記とは第一義的にはそこにもっぱら個人的問題が綴られる文芸形式であり、従って、その意義は第三者には理解しにくい。これこそ、この作品の読みにくさの所以である。しかし逆に言

⁴⁸ Там же. С. 375-376.

えば、そこに残された記述の内容は、本人が何を実存的問題として感受していたかを示すものである。その意味で、『作家の日記』は日記であるがゆえの重要性を有している。ただし、本論はその重要性を十分に探究したとは言い難い。上記の論述は、この作品に記された長大な自己物語を、さらに具体的に検討すべきことを示すものである。

Дневник как жанр и «Дневник писателя»: вопрос о Я-нарративе в творчестве Ф.М. Достоевского

САКАНАКА Норио

О публицистике Ф. М. Достоевского существует обширная литература,, однако, по мнению одного критика, «Дневник писателя» пока еще не привлек должного внимания исследователей. Это обстоятельство нередко объясняют разницей в творческом методе между романом и публицистикой. Но есть и другое объяснение – формальные различия между этими двумя видами литературы. В настоящей работе речь пойдет об этой второй версии.

«Дневник писателя» включает разнообразные жанры и стили, но его большая часть представляет собой чистую публицистику. Соответственно, «Дневник» носит глубоко социальный характер. В то же время в понимании автора это очень личное произведение. В одном письме он пишет, что «Дневник» представляет собой “совершенный дневник в полном смысле слова”. Такое определение многократно встречается и в его письмах, и в самом «Дневнике». Но содержание данного произведения не соответствует тому, что мы привыкли считать дневниковым жанром. И это несоответствие между содержанием произведения и его жанровой природой вызывает споры исследователей – собственно, с того самого времени, когда «Дневник» был впервые издан. В каком же смысле можно говорить об этом сочинении Ф. М. Достоевского как о “совершенном дневнике в полном смысле слова”?

Дневник принадлежит к жанру автодокументальной литературы. Согласно социологическому толкованию данного жанра, которому мы следуем в настоящей статье, его функция заключается в том, чтобы с помощью самоописания обрести собственную целостность. Поэтому содержание дневника, как правило, состоит из описаний вещей личных и частных. В отличие от автобиографии, которая требует от человека определенной дистанции по отношению к себе самому и потому носит ретроспективный характер, дневник организует личный опыт человека и способствует становлению его самоидентичности, а потому продолжается в его будущее.

То есть от дневника мы должны ожидать описаний личных дел его автора. Однако в рассматриваемом «Дневнике писателя», который для самого автора является квинтэссенцией дневника как такового, мы чаще всего встречаемся с публицистической манерой и предметом письма.

Разрешение этого противоречия, по нашему мнению, можно найти в сфере идей писателя. Здесь мы прежде всего имеем в виду его национализм. Потому что именно национализм является той идеологией, которая позволяет чувствовать симпатию даже к тем, с которыми у человека нет ничего общего, кроме национальности. И если национализм действует как рабочий фактор в процессе создания «Дневника», тогда становится понятно, почему социальные события России воспринимаются автором как личные. Тогда понятно и что имел в виду Достоевский, называя «Дневник писателя» дневником.

